

## 蔵書データ電算化要注意事項

システム導入前に蔵書データを電算化する場合は、最低限以下の事に気を付け、データ入力される事をおすすめします。  
今後のシステム導入時の作業の手間・運用開始後のシステム品質に大きく差が出ます。

### バーコード&データ入力

もし、システム導入前にデータ作成を開始するのであれば、その時、同時にバーコードシールを貼付けましょう。後でもいいと簡単に考えがちですが、この後で貼るという作業大変の一言ですまされるものではありません。

データ入力時にあった場所には本がなかったり(生徒がかってに移動?)、本当になくなっていたり、2~3万冊の中からこういった一冊を探すのに何時間?

しかも、こんな本がたくさんあると...

無駄な作業にならないように、ご注意ください。

また、図書館システムでのバーコードの種類は、「NW-7」これは業界標準です。

**弊社では、バーコード印刷のサポートもしています。**

**本とデータは必ず一意の結び付けをしておきましょう。**

### 資料コードの桁数・体系は必ず決める

データ入力時の資料コード、単純に「1」から順番に桁上げなんて事をしてはダメ。図書館システムでは、各種資料(図書・雑誌・視聴覚など)をちゃんと体系立てて管理します。(例) 1:図書、2:雑誌、3:視聴覚 等

これにより、拡張性に富み、豊富な機能を活用出来ます。

また、地域の各学校間で資料コードの重複を避ける体系も考えておきましょう。

例えば、A校の学校コードが「12」の場合。

資料コード: 12100001x

12→学校コード

1→資料種別

00001→(4~9桁目)管理用連続番号

x→最終桁、チェックデジット

と、言った感じです。

### バーコードにはチェックデジットを

聞き慣れない言葉かもしれませんが、バーコードを使って管理するシステムでは、常識中の常識です。**当然弊社システムでは、完全サポート。**

バーコードリーダはバーコードに当てたときの向き・角度・傾きなどで、誤読をする可能性があります。

みなさんも、よくコンビニなどで店員さんが同じ商品のバーコードを何度も読ませる光景に出会った事があるでしょう。まさに、それです。

コンビニのシステムでは、間違ったコードが読み取られるとシステムから誤読が指摘され再読み取り、と、言う事になります。

当然、同様にバーコードを使う図書館システムでも、システム側で誤読のチェックが出来ないと間違ったデータがそのまま処理され、データベースに不正データが残ります。

**ちなみに、弊社が過去に行った他社システムからの移行データで、チェックデジットを考慮していないシステムで、不正データの発生していないシステムはありませんでした。**

**誤読しても、そのまま処理するんですから、当たり前ですよ。要注意**

どんな事でも、ちょっとした事でも弊社にご相談下さい。図書館システムのプロがお応えします。

有限会社 ユーリンク E-mail: info@u-link.jp

〒532-0011 大阪市淀川区西中島5丁目6-9-608

TEL: 06-6305-7086